

# 国史学における仏教研究の動向と課題

— 総論・古代 —

曾 根 正 人

## I

昭和十九年に刊行された辻善之助の『日本仏教史』は、本邦の日本仏教史研究に於ける金字塔であった。著者の言う国史学研究と仏教学研究の統合という意図の下に、主要な運動・事蹟は皆網羅された上、今日尚光彩を失わぬ評言を付され、整然とした項目によって美事にまとめられた日本仏教史が現出したのである。だが本著が偉大であるが故に、それは以後の仏教史研究に一つの枠をはめる事になった。その枠とは、本著の項目分けである。本著以後今日までの仏教史研究の成果は莫大なものである

が、国史学の中で日本仏教自体を専門的に追求していく研究は、基本的にはこの項目に従ったものである。日本仏教史を目立った事象に従って短期間にまた分野的にも割合細かく分断した項目ごとに、様相をスライドの映像のような形で明確に浮び上らせると言うのが『日本仏教史』の手法であったが、その映像をより精密にしていくながら本著以後の仏教史研究の基本線であった。

勿論国史学の他分野の研究の発展に伴い、仏教史研究にもその成果は取り入れられて来たし、また前近代社会に於ける寺院の位置の大きさから経済史・制度史等の研究分野に於いて寺院が取上げられ、その影響は仏教史に

も及んできた。だがこれも前者に於いては辻の項目を變更するのではなく、国家仏教なり諸大寺院なりの既設の項目内部を精密化していくものであったし、後者ではその成果が部分的に仏教史に用いられる以外は、大むね本来の分野の成果として命を得ており、辻の項目立てを動かすような性格のものではなかった。

また所謂過渡期・変革期というものの研究もなされたが、それは多くは前の時代の或いは後の時代の項目の要素を前後に時間的に拡張して双方をくつつけるといふ手法であり、間に新たな媒介物を置く場合は有っても基本的な項目立てに変化を迫るものではなかった。

結局辻以後の日本仏教史研究は、彼の設定した項目立てという枠の中で成果を上げてきたのである。この事を端的に証明しているのが今日でも少しずつ新刊の加わっている日本仏教通史である。筆者によって多少の特色はあり、新しい成果もつけ加えてはいるが、その構成の枠組を見ても辻のそれと殆んど変化していない。辻の立てた項目立てが今日尚日本仏教史を俯瞰する場合の基本的枠組である事が明確に看取されよう。

その事自体は非難すべき事でも何でもない。辻の枠組の整合性が彼以後の研究によって検証されているとも言えるし、またその枠組に乗って成された膨大な成果を見れば、この御蔭で無駄な労力が省かれ、精緻な研究がなされ得たとも言えるであろう。

ただ今日、辻の項目の下に精密で豊富な業績を集積した日本仏教史研究の成果を並べてみて、連続した仏教の動きがイメージできるであろうか。或いは何世紀の仏教とか何々時代の仏教とかを対象として総体的なイメージが結ばれ得るであろうか。辻の項目立ての下に詳しい説明がなされ、その項目の内容がどのように生起し、変容し、時代の中でどう位置付けられるかといった事は解明されていても、あくまでそれはその項目を主語としたものであり、項目内での自己完結的説明をしているに止まっているのではなからうか。

辻の項目は基本的に或る割合短い時期の仏教の諸側面を取り上げたものであるから、その内容を精密化する研究と同時に項目どうしの有機的連関を指向する研究がなされねばならないにもかかわらず、現実には前者のみが

先走って項目の外皮を極めて厚いものにしてしまったのではなからうか。その為に今日我々が或る時代の仏教についての業績を集めてみても何らまとまったイメージは結像しないし、ましてや古代から変容しつつもずっと連続していく仏教の姿などは少しも浮んで来ない。一言でいうならば『日本仏教史』という辞典の項目ごとに仏教史研究が解体拡散してしまっているのである。

仏教史研究がこのような路筋を辿った発端は、やはり『日本仏教史』の方式にあると思う。辻は国史学に於ける仏教研究と仏教学のそれとを統合するという本著の目的の為に、教理・信仰から政治・社会現象にまで至る仏教の諸側面を同列に並べて叙述するという形を取った。諸々の事象を網羅・整理して日本仏教史を通覧するという本著の至上目的からして止むを得ない仕儀ではあったが、この為に仏教が本来世界宗教としての体系的思想であり、如何なる現象にしても根源的な水脈はそこに得ているという基本命題が霞んでしまったのではなからうか。ともかく目につきやすい特色ある現象を摘出し、仏教本来の思想からの距離は関係なしに並べ、叙述するという

形になった事は否めないと思う。そして以後の研究は、この諸々のレベルの異なる事象を同列に扱おうという枠組の中で、辻の立てた項目の内容を精密化するという方向に進んだのであるから有機的連関なぞできようもなかったのである。

このような状況の仏教史研究に於いて、今日最も求められているのは、膨大な業績に有機的連関をつけて時代時代の仏教のイメージを形成する為の核の存在であろう。そしてその核になり得るのは、仏教をして仏教たらしめている中心たる教理であると思う。教理は実に様々な要素を含む仏教の中で、何といっても不可欠のものであり、如何なる信仰、或いは社会現象にしても鵜極的源流はここに発しているのである。にもかかわらず昨今の国史学に於ける仏教研究に於いて最も欠落しているのはこの部分なのである。国史学の仏教研究と仏教学のそれとの統合を目指した辻の跡を襲った史学研究は、奇妙なことに教理は仏教学の方へ押しやられた上での辻の立てた項目内容の精密化を進めてきたのである。この路線をひたすら走り続け、次第に雑然とした様相を呈しつつある今日の

仏教史研究に於いては、各々の対象を源泉となる教理との関係・距離によって位置付けする事が急務であり、その為には研究者個人々々が教理を常に意識の中に置いて、それとの関係・距離を計りつつ個々の対象の研究を進める必要があると思う。

そうする事によって、莫大な仏教史研究の業績が各々所を得るに留まらず、世界仏教の中で日本仏教の位置付けという大問題解明への糸口も開けてくるのではなからうか。

顧るに、この点すなわち世界仏教の中での日本仏教史という視点も従来の日本仏教史研究に欠けていたものである。日本仏教史の研究者が外国仏教を問題にする場合は、専ら中国なり朝鮮なりからの制度・教理・經典の導入、僧侶の交流という次元に於いてであった。言うなれば日本仏教史の中で発見された諸事象がどこから来たかという淵源についての関心で問題にされただけで、中国・朝鮮仏教に於いて日本仏教はどのように捉えられていたか、また日本側の意識とのズレはどうかといった日本仏教を相対化してその位置付を問題にするという視角

は乏しかった。その為中国・朝鮮の仏教が取上げられても結局は日本仏教の目立った特色を叙述する為の背景に退いてしまい、世界仏教の中での日本仏教などという事は問題にならなかったのである。

そこで教理であるが、これは印度から東へ伝播する内に変容を受けてはいるが、基本的にはグローバルな性格を持っている。これを核として印度・中国・朝鮮・日本にわたる仏教思想の大きな流れを把握し、それとの関係・距離によって諸々の現象を位置付けるならば、世界仏教の中に日本仏教の諸側面が定置され、日本仏教史研究も世界仏教の中にその位置を見出し得るようになる。そうしてこそ世界仏教の中の日本仏教という大問題は解明へと向うのではなからうか。ひたすら細分化・精密化の路を進み、有機的內部連関を失って、日本仏教とは何かという間に却って答えにくくなってしまった今日の研究を総合活性化するには、教理は避けて通れない対象なのである。

国史学の仏教研究に於いて教理が敬遠されてきた理由の第一は、上記の如き史学研究の姿勢に在ったと考え

られるが、もう一つの理由は教理を専門に研究している  
 仏教学研究の側にもあったように思う。日本仏教に関  
 わる教理の研究は、今日まで多く宗門関係者が中心であ  
 ったが、その研究は分析過程に於いて非常に鋭い斬新な  
 視角や、仏教史全体に関わる重要な問題提起を持ちなが  
 ら、往々にして最終的には護教論へと落ちついてしまっ  
 たり、仏教学の中でのみ完結する形となっていた。その  
 為に史学研究者がその成果を利用するのをためらわせる  
 形になっていったように思われる。何と云っても教理の専  
 門家の研究である為に、その路の素人である史学研究者  
 としては、全体のコンテクストから外して研究の中途部  
 分を上手く利用するのは難かしい、かといって結論が結  
 論である為に全面的には依拠し難い、こういったケース  
 が多々あって、次第に史学研究者を遠ざける結果となっ  
 ていったのではなからうか。仏教学研究には他分野の  
 研究者にも利用できるような開かれた成果をもたらし  
 いただき、史学研究者も積極的にそれを活用していくな  
 らば、史学研究者の教理関係の史料への眼も開かれ、仏  
 教史研究の中に教理が確かな地歩を占めていく事が可能

になると思う。この点史学研究者と共に仏教学研究に  
 も期待したい処である。

さて史料の点では、教理関係と並んで史学研究者が忌  
 避しがちだったものに文学作品がある。説話集や往生伝  
 の類いは結構利用されてきたが、多くの場合その扱いは  
 統計的に処理されたり傍証として用いられる事が多く、  
 その他の文学作品に至っては出家・往生・法会といった  
 場面の描写が便宜的に用いられる程度で、とても活用さ  
 れているとは言いがたい状況である。これは文学作品が史  
 料として一級のものとは言いがたく、扱いに慎重を要する  
 事が主たる原因であろう。だが広く貴族から一般民衆に  
 までわたる信仰を研究する時、文学作品は実に豊かな世  
 界を提示してくれる。これを無視して仏教史を語ろうと  
 するならば、それは政治的・制度的方向に片寄ったゆが  
 んだものにしかなるまい。もっと積極的に用いられてし  
 かるべきだと思ふ。

またその用い方であるが、機械的・便宜的に利用する  
 ばかりでなく、もっと作品内部までつっ込んだ利用をし  
 ても良いように思う。これは作品世界の持っている論理

に研究者自身が取り込まれてしまい、作品を相対化して  
 おく客観的視座が揺ぐという危険性はあるが、仏教思想  
 を問題にする場合など作品内部まで入った分析をしてこ  
 そ、語り手のそして語られている内容に含まれた思想が  
 抽出できるものと考ええる。その分析に際しては国文学者  
 の分析視角を参考にするのも良いであろう。国文学の研  
 究は仏教に関わる場合にも、どうしても作品そのものの  
 解釈・鑑賞を目指している為そのままでは利用しにくい  
 が、作品内部に切込んでいく視角などは大いに活用すべ  
 きものと考ええる。そしてこのような作業を積み重ねる事  
 によって、文学作品自体の仏教思想といった国文学と相  
 互交流可能な領域も開かれて来ると思うのである。

以上述べ来た事をまとめると、今後の日本仏教  
 史研究をより実り豊かなものとしていくには、仏教が宗  
 教である以上その核となるのは教理である事、仏教は日  
 本に限定されない広がりを持つ世界宗教である事、そし  
 てこの二つの土台の上に日本仏教の様々な分野にわたる  
 事象が展開している事を再認識して、旧来の国史学の枠  
 に囚われない学際的研究が目指されねばならないという

事である。殊に、史学研究者が縛られがちだった一般史  
 学が対象としてきた対象・史料ばかりでなく、仏教の核  
 をなす教理、豊かな世界を提供してくれる文学作品とい  
 ったものに目を向け、またその分野の成果を取り込んで  
 行かねばならないという事である。そうする事によって  
 迂以来の枠組の下に内容の精密化を追及し、成果の有機  
 的統一がなされていない観のある日本仏教史が、グロー  
 バルな視野の下に統合された動的な姿を形成していく路  
 が開けるものと思ふ。

## II

次にIで述べた事を踏まえて、ここでは古代仏教に焦  
 点を絞って論ずる。古代仏教史研究も様々な分野で成果  
 を上げてきたが、殊に目立つのは国家仏教についての研  
 究である。なかんずくその政治的側面(天武期・平安初期  
 の律令国家の仏教政策)や制度面(国家の政策を實行していく  
 為の制度や機構)の研究の進展は素晴らしいものであり、殆  
 んど行き着く処まで来たという観すらある。日本に於い  
 ては仏教は国家主導の形で導入発展させられていったの

であり、国家仏教が古代から中世に至る迄の日本仏教の最大の骨格を形成してきたのである以上、古代仏教研究がまずここを中心に進んだのは自然の成行であった。またその研究が政治面・制度面を主軸としていたのも残存史料の関係から肯ける事であった。

だがこれによって国家仏教の研究が事足りるとするわけには行かない。実際に国家仏教を担った僧侶達の実情・理念・運動という重要な側面の研究が余り進んでいないのである。鑑真招請を巡る僧界の動きについての石田瑞麿・佐久間竜氏の研究、或いは僧団内の学問の在り方についての二葉憲香氏の研究等近年貴重な業績が上げられてはいるが、まだまだ永いレンジにわたっての僧界の通念や内部状況が問題にされるまでには至っておらず、大きな衝撃を与えた事件に対しての僧界の反応が云々されるという程度に留まっている。国家の仏教政策はいかなるものであれ、担い手たる僧団の在り方を意識している筈だし、国家仏教の制度・機構は僧侶達が関与してこそ機能するのだから、これを無視しての分析は極めて機械的なものになってしまう。そして旧来の国家仏教研

究には確かにこの傾向が看取されるように思う。仏教政策のねらいや効果、国家仏教制度・寺院内制度を解明するのは勿論重要な事だが、それを担った僧侶達の置かれていた状況・思想・動向をも解明する事によってこそ、その政策なり制度なりの十全な姿が見えてくるのであり、形式的上部構造として浮び上る事なく歴史の中に位置されるのではなからうか。

断っておくが、私は僧侶についてのしっかりと研究がなかったなどと言うつもりは毛頭ない。大きな足跡を残した僧侶についての研究は国家仏教よりも古くからなされ、宗門関係者の研究の寄与もあってその成果は瞠目すべきものである。しかもこの分野では、僧侶個人の信仰・教学のみならず、彼を取りまく環境、周囲への影響、社会・政治への関与等々実に多方面からの研究がなされ、各僧侶についてかなり完全に近い像が形成されてきた。だが問題なのは、対象がいずれも傑出した偉大な個性・業績を持つ僧侶に限られていた事である。この為にまず第一には、研究の際の思い入れが強く、各々の僧侶の時代から突出した部分ばかりが強調され、歴史的存在とし

て時代状況に拘束されていた部分には余り光が当てられなかったように思う。さらに第二には、一人の傑出した僧が出現するにはその何倍もの裾野となる者達が居るといふ真理が等閑視され、対象となる僧侶が置かれていた僧団の在り方・通念・運動といったものには目が向けられ難かったようである。こういった傾向の為に、研究の莫大な成果にも関わらず、傑出した僧侶のみが一般僧侶とは隔絶して孤高に存在し、彼等のなす改革ばかりが目立ってしまい、平凡な一般僧侶こそが形成していった常態の僧侶社会の動向は見えないままに終わっているように思う。この点が不明瞭な為もあって旧来の古代仏教史研究は、表立った現象のみを追って、長いレンジに互るその底流にまでは切り込めなかったのではなからうか。種々の僧侶セクト・宗派・更には僧界全体の置かれていた現実状況、その通念的思想はどのようなものだったのか、また新しい運動の胎動はどういう形を取っていたのかといった問題は、なかなか解明しにくい問題だが、国家仏教の十全な姿を再現する為にも、傑僧を歴史的存在として仏教史の流れの中に位置させる為にも、そしてまた次

に述べる俗人も含めた個人的信仰研究の進展の為にも必ずや取り組まねばならないものであると思う。更言にうならば、このような研究の遅れは身近に利用されている史料に於いても重大な危険を看過せしめているようである。旧来『三国仏法伝通縁起』とか『扶桑略記』といった僧侶の手になる仏教史通覧は、簡便な典拠として頻繁に用いられてきた。またその使用に際しては、大して史料の性格は問題ともされていなかった。だがよくその内容を検討してみると、必ずしも無色透明に事柄が記されているのではなく、著者の立場性から来るのであろう偏向が有るように思われる。これは考えて見れば当然の事で、僧侶である以上著者は何らかの教学・宗派を奉ずる者であり、著述自体も必ずしも純学問的な目的でなされたわけではないのだから、偏向が無いとする方が不自然なのである。にも関わらず旧来は、僧界の教学状況内部へ入るのを忌避する風潮からこの点に目をつぶり、性格的に無色な史料として用いてきたように思う。この事の危険性は言うまでもあるまい。これらの史料の性格の再検討が急務なのは当然だが、このような状況を許す根源とな

っている上記研究の不備こそ改めて問題にされねばならない処なのである。そして、この方面の研究進展によってこそ古代仏教史研究の背骨的部分が形成されてくるのではなからうか。

さて国家仏教・僧侶個人の研究と並ぶ柱となっているのが個人的信仰の研究だが、貴族社会の信仰では、浄土教・密教修法といった大物については既に井上光貞氏、速水侑氏の研究が九・十世紀を境とする急速な展開相を解明しており、現象面のトレースはかなり進んでいる。また上流貴族と親交のある高位僧侶を軸として宗派の立場や宗派内の運動にも光が当てられている。だが一方民間信仰については、説話集や往生伝を史料に断片的諸側面を拾っている段階で、核となる布教僧の実態、更にはその教えの水源となる僧界の仏教思想も不明な為に独自の方向性を見出す事ができないでいるように思う。まず第一には史料内部までつっ込んで各説話が持つ信仰論理を抽出していく事が必要だろうが、最終的には僧界の思想状況の解明が問題とならう。この点は民間信仰に限らず、浄土教のように全階層を巻き込んで進展した信仰運

動の場合には、それを始動し信仰の源流となった場所として不可欠の研究対象であると言えよう。何故他ではなく浄土教が、十世紀以降に、全階層を巻き込んで急発展したかという問いに対する解答の一番始源的部分はそこにある筈だからである。

以上古代仏教に焦点を絞って問題点を指摘して来たが、結局は仏教の核となる僧界の在り方、殊に思想状況の研究の遅れという事に収束する。そしてその最大のネックとなっているのは、やはり教理の忌避であろう。日本古代仏教史に出てくる日本独自の教理・教学については、島地大等・富貴原章信・田村芳朗・藪田香融・櫛田良供・勝又俊教氏等の諸氏の優れた研究が有るのだが、これらの成果は今日まで国史学の一般的仏教史研究に充分取込まれないまま終っている観が強いし、常に基点であった中国から導入された諸々の教理・教学については研究上の視野には初めから殆んど入っていないか、精々中国仏教史研究の通説が辞典的知識として利用されるに過ぎない場合が殆んどである。このような現状では僧界の思想状況の解明は到底期し難い。教理・教学との正面から

の対峙はIで述べた国史学に於ける仏教史研究のあるべき姿という大きな観点のみならず、古代仏教史研究に於いても焦眉の課題なのである。

もう一つ古代仏教史研究全体に必要とされている事として、最後に古代仏教の在り様についての理念型・或いはそれへの指向を挙げておきたい。いま我々古代史の仏教研究者が古代仏教の主たる在り様は何かと問われた時、何と答えるだろうか。国家仏教・学団仏教といった解答が想像されるが、果してそれらの内どれでも、古代仏教の主脈という重みに耐え得る程の概念内容を有しているだろうか。所詮これらは、古代仏教の何らかの範疇に於いてのネーミングであり、しかも余りしつかりした規定なしに用いられている名辞であって、とても古代仏教の主脈たるに耐え得る力はない。辻の設定した枠組に沿って実証的で精密な研究が積まれた今日、いつまでも概念内容のあいまいなまた部分的な事象を覆うだけの名辞の世界に住しておらず、古代仏教の主脈は何かという本質的問題へと目が向けられても良いのではなからうか。いづれの研究者にしても、如何に細かい対象を扱って

も、対象とする時代の仏教についてのイメージは何らか有している筈である。それならば由来の如く対象へひたすら穴を穿っていく方向ばかりでなく、一方で比較の対象としてでも良いから目を向ける対象を広げて自分なりの整合的像 $\parallel$ 理念型を構築していく方向は可能だした必要と考える。そうしてこそ、自己の専門領域だけに限らず、広い範囲にわたって他の研究者との接点もでき、古代仏教史像を再構成していく為の有効な論議も生じ得るのではなからうか。

私がこのように述べるのは、実は隣接する中世仏教史には黒田俊雄氏の顕密体制という魅力的な理念型が存在するからでもある。顕密体制は、思想的背景や形成過程が充分には論じられていない点等問題点はあるが、古代後期から中世を貫いて連続的長期的に仏教史の主脈を問題としている点、概念内容が整合的で明確である点に於いて出色の理念型であると思う。勿論これに乗っかって、やたら何でも顕密体制だと言って済ましてしまうのでは無責任なレッテル貼りになってしまいうから、様々な研究とぶつかる中で批判・検討が加えられて内容が整備修正

されていく必要があるのは言うまでもない。だが将来への課題や批判はともかく、こういう理念型が存在するという事は仏教史家として羨望に耐えない。このような理念型が出現する事によってその時代の研究は本質的な問題に於いて飛躍的展開を見せるからである。古代仏教史研究も優れた成果を誇ってはいいるが、古代を通じて流れる主水脈という窮極的目標に向うには巨視的な立場からの理念型の構築が目指されねばならないと思う。

(そねまさと・就実女子大学講師)